

# 長崎北病院 伝言板 9月号

令和6年9月1日発行

9月。台風一過の爽やかな秋晴れ。ではなく照りつける日差し。残暑。でも、空の蒼は少し深くなった気がします。台風10号。長崎県に上陸したらいいですが大したことなし。よかった。しかし、大分、宮崎、四国、さらに、関西、関東など離れたところで大雨。「こっちに来るな、曲がれ、よそにいけ」と祈り続けた我が身としては少し複雑。悪いことはしてないけど「ごめんね」の気分。もう台風は結構。



## 飛ぶ勇氣、飛び込む決断

酷暑、炎暑の今夏。熱中症が多発。買い物に出かけて倒れた、外の仕事でめまいや嘔吐など。たくさん運ばれてきました。コロナも暗躍。急に立てない、脳卒中かもということで救急搬送されてきました。あれ熱がある。検査するとコロナ陽性。こんな方も。しばらくは残暑。コロナもあります。水分を摂って、涼しい時に活動。人混みではマスク着用がよろしいかと思えます。



オリンピックが終わってパラリンピックが始まりました。オリンピックの言葉に感動したり笑ったり。しかし、何かに打ち込んできた人の言葉や行動には心に響くものがある。永瀬貴規。柔道81Kg級、金メダル。長崎市出身。当院の職員にも「高校の同級生、私友達です」という方がいました。身近な金メダリストです。リオのオリンピック(2016)銅メダル、東京オリンピック(2021)金メダル、そして今回のパリ、再び金メダル。順風満帆のように見えますがそうではなかった。東京の金の後、勝てない日が続いたという。それでも徹底的に研究し練習した。そして金メダル。



結果を出し続けられる要因を問われ、「つらい時、うまくいかない時もやるしかない。継続すること、私の場合はこれに尽きる」。結果が出ないと辞めたくなる、別のことに目がいく。それでもやり続ける。継続は力、その結果が連覇。



北口榛花。ご存知、やり投げの金メダリスト。全身筋肉、運動神経。何をやらせても抜群と言う。全日本小学生バドミントン選手権団体優勝、中学はバドミントンと水泳。高校に入ってから始めたやり投げ。高校2年でインターハイ優勝。初心者が1年で高校の頂点。抜群の才能。でも、あくまでも日本での話。才能だけでは世界では通じない。もっと強くなりたい。単身やり投げの先進国、チェコに渡った。言葉も通じず。チェコのコーチの指導を受けたい一心。苦労はあったはず。今はチェコ語もペラペラ。半分はチェコ人と笑う。そして世界の頂点へ。誰でも井の中の蛙(かわず)から自分で這い上がるのは至難。しかし、先進の地で指導を受ければ一気に階段を登れる。



今回のオリンピックでフェンシングが大躍進しました。ヨーロッパが本場のフェンシングで日本が金2銀1銅2。その躍進を支えたのはフランス人コーチのエルワン・ルペシュー氏。就任時に精神力の弱さを指摘した。「君たちはかわいくておとなしいパンダ。フェンシングはうまいが怖くはない」そして今回の躍進。「“パンダ”の時代はとっくの昔に終わった。選手たちは選手たちはきれいな4匹の“虎”になった」と称賛した。

医療の世界も同じ。飛躍的に進みたければ先進地で吸収する、達人に習うが早道。学んで飛躍する。飛ぶ勇氣、飛び込む決断。



そして、伊藤智也61歳。パラリンピック車椅子400mで銅メダル。難病多発性硬化症。それでも鍛え続ける。毎日筋トレ、4時間走り込み。東京ではメダルなし。それからのトレーニングで胸囲は4cm増えた。61歳のパリで銅メダル。ロスアンゼルスオリンピックも出ますよと気炎。その時65歳。胸囲はさらに太くなるのでしょうか。意欲と意思があれば年齢は関係ない。頭が下がります。(A.S.)